

1年分の新作情報を最速リリース&ロレックス・ニューモデル徹底リポート!!

2004年7月1日発行 増刊
2002年5月28日第三種郵便物認可

The cover features a large, bold title 'Match BEAT' in green and white. To the left, there's a black and white photograph of a car wheel. Below the title, the subtitle 'WATCH & SHOP MAGAZINE ウオッヂビート' is written. A dark grey oval on the left contains text about the development of a concept by Tag Heuer. At the bottom left, there's a list of four items. On the right side, there's a 'Men's Brand' logo with publication details: '2004年7月号増刊 定価 560円' and '2004 JUL VOL.11'.



タグ・ホイヤーが開発した 超絶コンセプトにまつわる事件

**20年目を迎える
ブライトリング・クロノマット
アンティーク・ムーンフェイズへの扉
アンチマグネットイック～耐磁時計の真実**

**Men's
Brand**
2004年7月号増刊
定価 560円
2004
JUL
VOL.11
7

待望のロレックス・ニューラインナップは **デイトナ・ニューダイヤル、 ターゴグラフ×4カラー**



エクス。プロラ!が 買いな理由申!!

解き明かされるブラックEXの系譜

デュフォー、ロート、ハルディマン 孤高なる独立時計師たち

卷頭特集

卷頭特集 First Impression Of BASEL WORLD バーセルワールド&SIHH 最速情報



孤高と向き合う 独立時計師たち

INDEPENDENT WATCH MAKER
INTERVIEW AND REPORT

それを一言で個性と語るには、あまりにも軽すぎる。

その作家本来の象徴すべき何かを実現するために、

唯一無二の作品と向き合う姿。

その真摯な眼差しの先にあるものは

何なのだろうか?

Photo / Toshio DEBATA

Text / Akira MATSUDA

Design / Masami SUZUKI



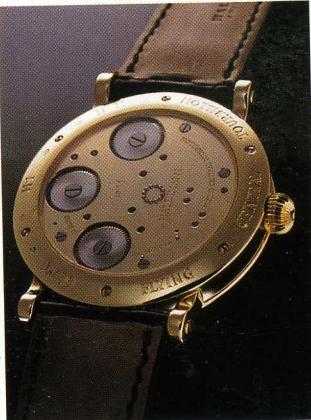
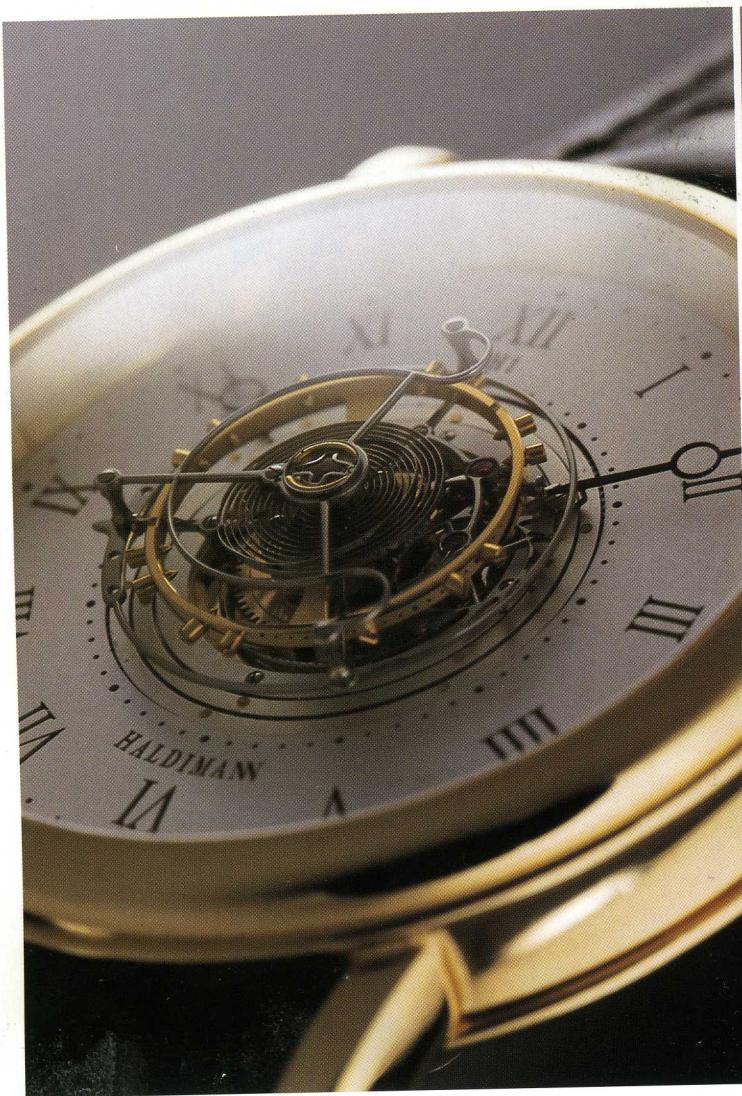
BEAT HALDIMANN

(ベアト・ハルディマン
×
ハルディマンH1フライング)

キーワードは「音」、
旋律によって調律された
唯一無二のトゥールビヨン。

ハルディマンのトゥールビヨンほど、本質的な誤解をもって解釈されていた作品もないだろう。フライングトゥールビヨンをセンターに配置するという機構的な挑戦を実現した上で、ハルディマンは「音」にまで拘った。しかしこのことが、既に大きな誤解だったのだ。フライングトゥールビヨンやそのセンター配置すらも、氏が拘った「音」を表現するための手段でしかなかったとしたら…。時計というメカニズムが発する心地よい音色に、徹底的に拘った無二のトゥールビヨンがここに存在する。

Central Turbillon H1“Flying”



ハルディマンH1フライエングが奏でるシンフォニーは、往年のブレゲの名作を想起させる。そしてその音色こそ、氏がコンセプトの根幹においていたものだった。センターに配置されたフライエング・トゥールビヨン・キャリッジ、少しケースの奥にオフセッテられたダイヤル面、そしてドーム型ガラスとダイヤルとの間にできる空間などは、視覚的な美しさもさることながら、すべて「音色」を生み出すために必要な要素だったのである。ここではまず、氏が手作業で生みだした各バージョンの織密さと、あの「音色」を生み出す空間のバランスを存分に眺めて欲しい。往年のブレゲ懐中時計が奏でたといでのサウンドが聞こえてくるだろうか?



**BEAT
HALDIMANN**

いま時計づくりの魂は失われつつある。 僕は機能とデザインと、忘れられた音色を創りたい。

2002年のバーゼル・フェアで、センター・トゥールビヨン「ハルディマン H1 フライエング」を発表して脚光を集めたベート・ハルディマン氏。

トゥールビヨンをセンターに配置することの難易性、さらにトリプルバレルにより安定性を高めた点ほか、アカデミックな側面からのメカニズムの解明については、ドイツや中国をはじめ各国の専門誌が深く追求している。

しかしハルディマン氏が、なぜこの機構を着想し、開発したかという根本の部分には薄い闇がかかつたような状態だった。そこで今季バーゼルワールドのアコデミーブースと、スイス中部に位置するベルン州トゥーンの高台にある氏のアトリエを訪ね、眞の意味での開発秘話、思想哲学に至るまでをじっくりと伺った。

そこから浮かび上がってきたのは、予想を大きく超えた「ハルディマン H1 フライエング」に対する氏の独創性と同時に、人間性の奥深さだった。

昨年、「バーゼルワールド 2003」の会場で会った時に、氏が「H-1」を手渡してくれ、「風防を耳にあてて振動音を聞いてみてくれ」というやり取りがあった。その大きく、澄み切ったビートに対して氏は、「これがスペシャリスト・サウンドなんだ」と微笑した。

ことによると氏は、美しいサウンドを再現するために「H-1」を開発したのではないだろうか? 1年がかりで倍加していく、その疑問からぶつけてみると、「H-1」では、ブレゲが開発したオリジナル・トゥールビヨンのサウンドに比肩するようにトゥールビヨンをセンターに配置したのです。言い換えると、「H-1」のフライエング・トゥールビヨンでないと、ブレゲに負けないサウンドを再現することはできないのです」と氏は断定した。

すなわち「H-1」で、ブレゲの懐中時計とも、ブレゲが手掛けた懐中時計はどちら、もう一片が離れる。この際に中音で「カチカチ」と鳴る。もう一つは、ヒゲゼンマイが収縮する時に「ウワーン、ウワーン」という高音が発する。

氏はあらゆる時計が放つ上記のミクス音からなる波長データを調べておたり、科学的な解析と感覚の両面から、ブレゲサウンドへのアプローチを行った。

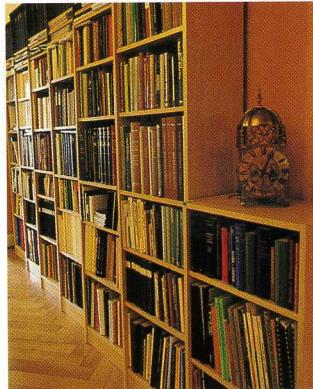
氏は続けて、「トゥールビヨンでなくとも、ブレゲが手掛けた懐中時計は美しいサウンドがします。あの音を目指す場合、懐中時計であれば、まだ容易なのですが、ケースも大きいため、共鳴させることができます」と。

すなわち「H-1」で、ブレゲの懐中時計に匹敵するほど美しく大きなサウンドを奏でるために氏はセンタートゥールビヨンというスタイルをとつてテンプを中央に配置し、ダイヤルと風防を共鳴装設と捉えて設計を行ったのだ。

「普通のトゥールビヨンはムーブメントに組み込まれているのに対して、私のセンタートゥールビヨンはダイヤルの上にテンプを包むキャリッジが出るのです。上にあることにより、大きな空間で音が反響して、その結果として風防も振動してより美しい音を奏でます。テンプから出る2つ中・低音と高音、キャリッジを動かすギアから出るサウンドが



ハルディマン氏の自宅アトリエには、時計製作と歴史に関する膨大な資料が保存されている。書き事は氏は「この本のどこに何書いてあるのか」をきちんと把握しており、我々の質問にすばやく答える。工房に保存されているパース類から工具の1本1本にいたるまで、これらはキチキと整頓されて、ビックリ並んでいた。作業机を見れば職人の力量が解るところよく見えるが、ハルディマン氏のデスクからは真面目で几帳面な仕事へのスタンスがよく伝わってくる。工房には修理を手掛けているアンティーククロノグラフなどもいくつか置かれており、これらと接することで学び取れる事も多いのだ。真鑑的な姿勢を見せてくれた。



BEAT HARDIMANN × Central Tourbillon H1 "Flying"

ミックスされ、「H1」はシンフォニーを奏でるのです」。

「ケース素材による差は、「く」微小でわからない程度だと思います。熱による膨張といった季節による温度の影響の方が大きいでしょう。温度の変化は無関係といえます。けれどそんなことよりも、「H-1」をどこに置くかが重要です(笑)」と言いながら氏は、古いバイオリンの上に「H-1」を置いて見せた。

そのバイオリンはフレケが生きてい
た時代のもの。すなわち作られてから
200年以上経過しており、時計製造
のために氏が求めたもので、弦は張ら
れていない。

ヤリストシンフォニーを目指したきっかけは、「代々家に伝わるクロックの心安らぐサウンドの再現」といったようなセンチメンタルバリューハーではないようだ。「見在つきかけほどんじ」は、頃だぞてで乍

られています。私自身は、魂のこもった昔ながらの“美”を再現したかっただけなのです。魂があり、美しいサウンドを奏でる時計を「全身全霊を擣げて作る」の具現が「H-1」なのです」と強調した結果として、当のブレゲは、サウンドにまで注意を払って製作したのだろうか？

「ブレゲがサウンドまで考へていたのかはわかりません。あらゆる文献を調べていますが、探るのは不可能でしょう。ただブレゲもそうですが眞の時計師は

うにして語った。 ハルディマン氏が取り出してくれた資料の中には機械音に関するテキストもあった。例えばテンブリング・アンクルが叩かれ音、アンクルの振り止めとギンゴ音の足を石が叩きあつて発する音、そしてアンクルとテンブリが今度は逆方向に叩く音など。。。さらにヒゲゼンマイが収縮するときにも高周波の音を発するし、トールペイヨンケージが動くとき、同期させるためのギアからも音を発する。これらの波長データは本来、「こういう音の範囲内ならば正常に作動している」といった設計、修理のためのテキストなのだが、これを総合的に理解し発展させて、自らが望む最高の「音色」にまで昇華させるとなると、もう凡人の理解の及ぶところではない。これまでの音楽理論

そういえば「H-1」のマークメントは、
Ca-NEN-Aと名付けられているが、
本にはまだ行ったことがありませんが、
日本文化に関する本を読んでいくうちに、
自分を少なく(無心)といふことや、
センター(中庸)であることを説く”禅
の心”に感銘を受けました。偉ぶること
をせず、その場、その場でベストを尽く
すといった禅の教えが、“H-1”的セン
タートゥールビヨンや、私のトレーディング
ターム(月の満ち欠けで表現したサークル)は

勉強家であり、不屈の忍耐力に裏打ちされた、「優しさ」が魅力である氏は、アトリエにあるキッキンで休息の際にも手作りする「H-1」の製造をより定したものとして、次の作品にチャレンジすること。

ケと並びうる音を再現した氏に対して、ある顧客が「もしもブレゲが生きていて、腕時計のトゥールビヨンを創るとしたら、”H-1”と同じようなセンタートゥールビヨンの腕時計を作ったことでしょう」と言つたそうだ。【H-1】を称賛する数限りない言葉の中で、「最もうれしかったコメントです」とハーマン氏は述べた。

得るのだが、その試験では複数の試験官から、時計の歴史、メカニズムなどについて質問責めにされたり、難易度高い筆記、実技と大変な内容なので、ビヨンの腕時計を作ったことでしょう」と言つたそうだ。【H-1】を称賛する数限りない言葉の中で、「最もうれしかったコメントです」とハーマン氏は述べた。

得るのだが、その試験では複数の試験官から、時計の歴史、メカニズムなどについて質問責めにされたり、難易度高い筆記、実技と大変な内容なので、ビヨンの腕時計を作ったことでしょう」と言つたそうだ。【H-1】を称賛する数限りない言葉の中で、「最もうれしかったコメントです」とハーマン氏は述べた。

べてを注ぐのです。ベストを尽くした結果、グッドサウンドを実現したのかも知れません。このことは、二ワトリが先かタマゴが先か、といった類の超難問でしょうね」と氏は笑顔で語った。

ブレゲの時代から近代まで主流だった懐中時計と、現在のリストウォッチとは、時計学校卒業後、間違は、時計学校卒業後、間違して働きながら、かなり重い課題を立てて、日々の夜と、休日のすべてを使って4年間で、ここまでなさなければならない。

ちなみに氏は、スイス連邦が認定する上級時計師の称号であるマイスターの資格を持つている。1000人の時計師の中で、数人しか持っていない厳しいもので、しかも受験資格を得るために、



PROFILE

1964年生まれ。スイス・ベルン州エメンタール出身。
ゾロトーン時計学校を卒業。大手ファクトリーなど
を経て、'89年にトゥーンの時計店ヴァンゲルター
でアンティークウォッチの修復を行い、'91年に独立。
2年後の'93年に、マイスター時計師に認定された。